

取組の目的 【共同研究機関：森林総合研究所北海道支所】

天然更新により発生したカンバ類を健全な森林に誘導するとともに、木材資源として安定供給するため、更新初期に行う効果的・実用的な刈払い作業の技術開発に取り組んでいることから、試験経過について報告します。

**試験内容** 【更新初期の萌芽力を生かした保育方法の検証】

人工林主伐跡地において、地がき処理により発生したカンバ類を主体とする広葉樹稚樹の成林を図るため、競合植生による被圧を受けているカンバ稚樹を植生とともに一定の高さで※台切り（刈高25cm、50cm）し、萌芽更新を促進

※台切り：地際から切断しその切り株からの萌芽により、勢いのよい新しい幹を育てる作業方法

■試験地の概要

- ・昭和27年植栽（63年生）のトドマツ人工林
- ・平成27年に40m幅の帯状伐採後、天然更新を図る更新補助作業として地がきを実施

■試験区の設定

- ・刈高25cmと50cmの台切り区と無作業区を設定
- ・令和2年6月に台切りを実施

**令和6年までの試験経過**

図1 台切り方法別の成長量

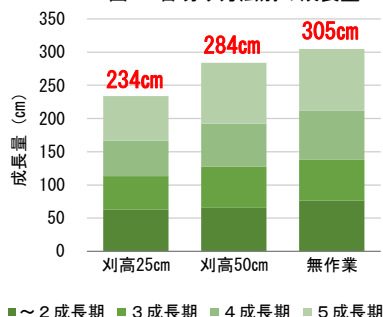
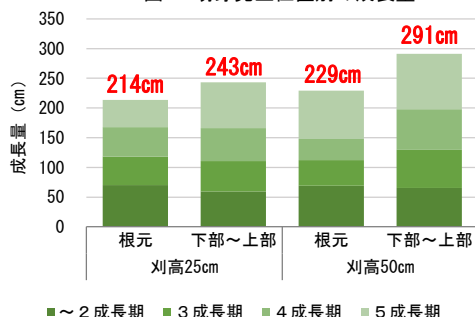


図2 萌芽発生位置別の成長量

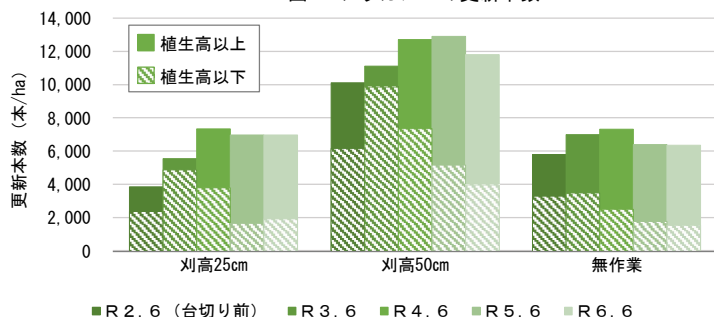
**■台切り方法別の成長量（図1）**

- ・各成長期ともに大きい順に
無作業＞刈高50cm＞刈高25cm

■発生位置別の成長量（図2）

- ・～2成長期までは根元、3～5成長期は下部～上部の成長量が多い
- ・根元、下部～上部ともに刈高50cmの成長量が多い

図3 シラカンバの更新本数

**■シラカンバの更新本数（図3）**

- ・刈高25、50cmは台切りにより植生高以上の本数が一度減少したものの、令和6年時点では無作業より多い
- ・台切り前からの増加率は刈高25cmが最も高い

まとめ

- 刈高の違いでは刈高50cmの萌芽成長量が大きく、発生位置の違いでは下部～上部からの萌芽成長量がより大きくなる傾向が見られました。
- また、台切りによる本数増加の効果が見られ、特に刈高25cmは高い増加率となっていますが、台切り区の平均樹高は無作業区に比べ、低くなっています。
- 以上のことから、台切り作業は更新本数や植生による被圧の影響を十分に見極め、導入を検討することが必要であると考えています。

令和2年9月（樹高48cm）



令和5年9月（樹高236cm）

